

## 具象以前

人生の最も大きな喜びの一つは、年来の希望が実現した時、長年の努力が実を結んだ時に得られる。私のような研究者にとっては、長い間、心の中で暖めていた着想・構想が、一つの具体的理論体系の形にまとまった時、そしてそれから出てくる結論が実験によって確認された時に、最も大きな生きがいを感じられる。しかし、そういう瞬間は、私たちの長い研究生活の間に、ごくまれにしか訪れない。私たちの人生のほとんど全部は、同じようなことのくりかえし、同じ平面の上でのゆきつもとどりつのために費やされてしまう。日々の努力によって、相当前進したつもりになっていても、ふりかえってみると、結局、同じ平面の上の少し離れたところにきているに過ぎないことを、あまりにもしばしば発見する。一つの段階からもう一つの段階に飛びあがれるのは、それこそ天の羽衣はごろもがきてなでるほどに、まれなことである。

そんなら人生の大半は、小さくいえばその人の個人としての進歩・飛躍とびだす、大きくいえば人類の進歩・飛躍とは無関係な、エネルギーの消費に終始しているのであろうか。決してそうではないように思われる。むしろムダに終わってしまったように見える努力のくりかえしの方が、たまにしか訪れない決定的瞬間より、ずっと深い大きな意味を持つ場合があるのではないか。ずっと若いころの私は「百日の労苦は一日の成功のためにある」という考えに傾いていた。近年の私の考え方は、年とともにそれとは反対の方向に傾いてきた。それに伴って、真理の探求の道を歩いた多くの科学者に対する私の評価も、昔と今とで大分違ってきた。

ある科学者が画期的な発見をするとか、基本的に新しい着想から出発した、ある学説を提唱するとかした場合、私たちはもちろん、その学者を高く評価する。一言にしていえば、科学者をその業績によって評価する、それは確かに公正な態度である。どんなにその学者が苦心さんたんしたにせよ、そこから独創的な業績が生まれなかったら、多くの場合、私たちはその人の価値を認める正当な理由を持ち得ないであろう。それはそうに違いない。しかし同時にそれは、外から見た時の、やや離れて見た時の評価でもある。

ところで、私たちは自分以外の学者の大多数が、どういう苦勞をしているか、何に苦勞をしているか知らない。自分の身近の少数の学者について、あるいは遠くにいる学者がある大きな成功を収めた場合についてだけ、それらの人々の苦心を知らされたり、関心を持ったりするのである。一人の人間の能力はきわめて限られている。自分以外の多数の人たちの苦勞に一々関心を持っていたのでは、自分自身が失われてしまうであろう。それもその通りである。

しかし、それにもかかわらず、私は近來、外から見て、離れて見て、ある人の評価をするだけではないかということ、ますます強く感じるようになってきた。ある人が何のために努力しているか、何を苦勞しているかという面を、もっと重要視しなければならぬと思うようになってきた。天の羽衣がきてなでるという幸運は滅多に來ない。一度もそういう幸運に恵まれずに一生を終わる人の方がずっと多いであろう。しかし、だからといって、そういう人の人生は無意味であったとは限らない。他人は知らなくても、その人自身は何かについて苦心をしつづけていたかも知れない。その「何か」が重要なことであつたかも知れない。「どんな風に」苦心したかが重要であつたかも知れない。

絵をかく人は、絵になる以前のイメージを自分の中で暖ため育ててきたであろう。彫刻家は素材を前にして、まだ現実化されない理想的な形態を思い浮かべているであろう。科学者の研究が一応完結するまでに、一編の論文となるまでに、どんなに長い間、生みの苦しみをつづけてきたのか。ついに絵にならない場合、ついに彫刻が完成しない場合、論文が出版されない場合、それがどんなに多いか。外から離れて見る者にはわからない。いわばそれは具象以前の世界である。混沌から、ある明確な形態をもった物が生まれるより以前の世界、生まれようとしている世界である。その人自身にとって、また深い関心をもって、その人の世界を知ろうとする人にとって、それは無意味な世界ではない。

科学文明の発達の結果として、情報伝達の方法が急激に変化してきた。新聞・ラジオ・テレビ等を通じて、私たちに与えられる情報が、ますます重要となり、私たちに圧倒的な影響を及ぼすようになってきた。それは一方では、遠く離れたところで起こった出来事、自分と直接関係のない人々を、身近に感じさせる作用を持っている。他方ではしかし、情報を受けとる個人の特殊性を越えて、あらかじめ選択された情報を万人に同じように与える作用をもっている。

それは既に具象化されたものの中からの選択である。具象以前の世界は初めから問題になっていない。

情報伝達だけではない。人間の頭脳の機能の一部までも機械が受けもってくれるようになってきた。しかし、そういう機械もまた、既に具象化された知識を適当な記号の形に変えた時にだけ質問として受け入れてくれるのである。そしてその機械が与えてくれる答えもまた、具象化された知識に関するものだけである。

人間は具象以前の世界を内蔵している。そしてそこから何か具象化されたものを取り出そうとする。科学も芸術もそういう努力のあらわれである。いわば混沌に目鼻をつけようとする努力である。人生の意義の少なくとも一つは、ここに見出し得るのではなからうか。

(一九六一年五四歳)

## 知性と創造と幸福

知性はしばしば寝た子を起す働きをする。教育が普及するにつれて、今まで従順であった子供が反抗をはじめて困るという親のなげきが聞えてくる。それはかえらぬ昔を恋うる愚痴のひびきをおびている。筋道だつてものごとを考える力ができくると、今まで何とも思わずに生きてきたことが急に変わって気がつく。やがて世の中には不合理なことがやたらに多いように思われてくる。不合理なことに敏感になり、強く反発するようになる。相当な教育をうける機会にめぐまれた人なら誰でも、程度の違いはあっても一度はこういう時期を通過する。問題はむしろそれから先の変化の仕方にある。

せっかく目ざめた知性をまた眠らせてしまう場合もある。人間世界はどうせ理屈どおりいかないのだと簡単にあきらめてしまうこともある。人間の知性では測り知れない何ものかがあ



る、それを信じそこによりどころを求めるといふようになることもあろう。

一たん目ざめた知性がいつまでも最初の鋭敏性を保つ場合もある。そういう場合には、しばしば知性は尖鋭に働くだけで成長がとまってしまふことがある。不合理な点を目ざとく見つけるが、建設的な意見をつくりあげる力にかけていることになる。

この世の中に不合理と思われることがたくさんあるのは否定できない事実である。しかしそういうものが存在していることにはそれぞれ理由があるであらう。理由があるといふことは、それが正当化されるということと同じではない。しかし正当化されると否にかかわらず、ある事柄がこの世に起る理由を知ろうとするのが知性の働きである。そういう働きを通じて知性が成長してゆくことも改めていふまでもないであらう。

「カラマゾフ兄弟」の中に出てくる人物の多くはうそばかりついている。うそをつかないアリョーシャやゾシマ長老の方がむしろ例外的存在である。他の多くの人物は困った人たちである。現実に自分たちの周囲にいてほしくない人たちである。しかし「カラマゾフ兄弟」からうける深い感銘はちよつとほかに比類がない。汚れた人たちのひきおこすいとわしい事件の連続を読

みながら、自分の心の奥底から洗われたようなすがすがしい気持になる。

自然科学の中でも特に理論物理学の目標とするところは、自然現象の奥にある合理性の発見である。十九世紀の終りまで物理学者は光が波であることをひたむきに信じていた。二十世紀になって光は粒子の集りであるという説が出てきた。十九世紀の物理学者たちは、光が粒子だという考えは間違いだとして、とつくの昔に捨ててしまっていたのである。波であることが本当なら、粒子であるというのはうそのはずである。粒子であるという説を復活させるなら波動説はひっこめなければならない。実際はしかし、光は確かに波だと思われるふしもあり、粒子だと思われるふしもあるのである。二十世紀の初めの二十年あまりの間、物理学者たちはこの矛盾になやみぬいたのである。結局量子力学という新しい理論体系ができて、光も物質もどちらも波動・粒子の二重の性質を持っているという奇妙な事態を、合理的に理解できるようになったのである。理論物理学はそれで一応の解決に到達したのである。ある範囲内の自然現象の合理性が把握されれば、それで一応満足してよかったのである。理論物理学者の創造的活動の中で一番大切なのは、ある観点から見て不合理と思われる事柄の奥底にある合理性を見つけた

することである。そのためには新しい観点へ飛躍的に移ることが必要であった。はじめから合理性のはっきりしているような対象ばかりあつたに限り、一番大きな創造力の発揮される機会はないのである。

人間世界のできごとに対しても、一見きわめて不合理と思われることからの奥に、人間の存在の仕方のある必然性を洞察するところに、知性をふくめた人間精神の創造的活動があるであろう。かつて私が「カラマゾフ兄弟」からうけた感銘が、理論物理学の独創的著作からうけた感銘と共通するものを持っていたことも、理由のないことではないであろう。

しかし人間世界の出来事の場合には、合理性とか必然性とかを見出すところで問題は終るのではない。そこで一番大きな問題は常に人間の幸福である。自分の幸福が問題であり、他人の幸福が問題である。何を幸福と感ずるかは知性だけの問題でないことはもちろんである。知性が容易に合理的に把握することのできない人間の感情とか情緒とかいわれるものの方がより直接に幸福につながっているのである。知性がまだ気づかずにいる潜在意識の働きが、そこではしばしば決定的な意味を持ちうるのである。

しかしこういう事情があるからといって、人間の幸福の問題に対して知性が無力だということにはならない。知性は成長し深化しうるところのものである。知性が自らを深めることによって、逆に人間性のより大きな領域を知性の面まで浮びあがらせることができるのである。このような努力が人間の幸福の問題と密接につながっている。外なる世界へ向っての科学の探究の進展が知性の深化によって裏づけられていないなら、新鋭の武器を持った野蛮人ができあがるだけであろう。

(一九五五年 四八歳)

昔<sup>しや</sup>釈迦<sup>しか</sup>は迦比羅城<sup>かひらじやうじやう</sup>の栄花<sup>えいかう</sup>を捨てて山に入<sup>い</sup>った。幾十年<sup>いくじゆんねん</sup>の修行<sup>しゆぎやう</sup>後<sup>ご</sup>、宇宙<sup>うちう</sup>、人生<sup>じんしやう</sup>の大真理<sup>だいしんり</sup>を悟得<sup>ごとく</sup>して、衆生<sup>しゆじやう</sup>済度<sup>さいど</sup>を行<sup>おこな</sup>わんと山を出<sup>で</sup>た。幾星霜<sup>いくせいそう</sup>の苦悶<sup>くもん</sup>の後<sup>ご</sup>とて顔色<sup>しやうしき</sup>は憔悴<sup>しやうすい</sup>し、形容<sup>けいよう</sup>は枯槁<sup>ここう</sup>して居<sup>ゐ</sup>た。誰<sup>たれ</sup>がこの偉大<sup>ゐだい</sup>なる仏陀<sup>ぶつだ</sup>を目<sup>め</sup>して敗者<sup>ぱいしや</sup>と言<sup>い</sup>えようか。

全欧<sup>ぜんおう</sup>に破<sup>や</sup>を唱<sup>とな</sup>へたナポレオン<sup>なぽれおん</sup>は果<sup>は</sup>して幸福<sup>しんぷ</sup>であつたらうか、大蒙古帝国<sup>たいもんこていこく</sup>の大汗<sup>たいかん</sup>を幸福<sup>しんぷ</sup>な人<sup>ひと</sup>とはいえまい。

幸福<sup>しんぷ</sup>に反<sup>はん</sup>する勝利<sup>しかり</sup>は真<sup>ま</sup>の勝利<sup>しかり</sup>ではない。誰<sup>たれ</sup>が不幸<sup>ふしん</sup>な勝利<sup>しかり</sup>を願<sup>ねが</sup>うものか。

真<sup>ま</sup>の勝利<sup>しかり</sup>は意志<sup>いし</sup>の貫徹<sup>かんとく</sup>によつて真<sup>ま</sup>の幸福<sup>しんぷ</sup>を得<sup>え</sup>ることである。所謂<sup>しゆゐ</sup>勝利<sup>しかり</sup>なるものは之<sup>これ</sup>を去<sup>さ</sup>るこ  
と甚<sup>いた</sup>だ遠<sup>とほ</sup>い。

(一九三二年一五歳)

## 真実

現実<sup>げんじつ</sup>は痛切<sup>いたせつ</sup>である。あらゆる甘<sup>あま</sup>さが排斥<sup>はいし</sup>される。現実<sup>げんじつ</sup>は予想<sup>よそう</sup>出来ぬ豹変<sup>ひやうへん</sup>をする。あらゆる平<sup>へい</sup>衡<sup>かう</sup>は早晚<sup>そうばん</sup>打破<sup>たふ</sup>せられる。現実<sup>げんじつ</sup>は複雑<sup>ふくざ</sup>である。あらゆる早合点<sup>はやがてん</sup>は禁物<sup>きんぶつ</sup>である。

それにもかかわらず現実<sup>げんじつ</sup>はその根底<sup>こんてい</sup>において、常に簡單<sup>かんたん</sup>な法則<sup>はふしそく</sup>に従<sup>したが</sup>つて動<sup>うご</sup>いているのである。達人<sup>たつじん</sup>のみがそれを洞察<sup>とうさつ</sup>する。

それにもかかわらず現実<sup>げんじつ</sup>はその根底<sup>こんてい</sup>において、常に調和<sup>てうわ</sup>している。詩人<sup>しじん</sup>のみがこれを発見<sup>はつけん</sup>する。

達人<sup>たつじん</sup>は少ない。詩人<sup>しじん</sup>も少ない。われわれ凡人<sup>ふたん</sup>はどうしても現実<sup>げんじつ</sup>にとらわれ過ぎる傾向<sup>けんかう</sup>がある。そして現実<sup>げんじつ</sup>のように豹変<sup>ひやうへん</sup>し、現実<sup>げんじつ</sup>のように複雑<sup>ふくざ</sup>になり、現実<sup>げんじつ</sup>のように不安<sup>ふあん</sup>になる。そして現実<sup>げんじつ</sup>の背後<sup>はいご</sup>に、より広大な真実<sup>しんじつ</sup>の世界<sup>せかい</sup>が横たわっていることに気づかないのである。

現実のほかどこに真実があるかと問うことなけれ。真実はやがて現実となるのである。

(一九四一年三四歳)

## 静かに思う

I

人間にとって最高の価値を有するものとして真善美の三つが挙げられたのは、いつの時代に初まるのか私は知らない。近來は真善美という言葉はほとんど人の口に上らぬようになったが、それはおそらくあまりにもしばしば使われた結果、その魅力を失ってしまったためであろうと思われる。そしてそれらは例えば文化とか道義とかいう言葉で置きかえられた。しかしどんなに言い古されても真善美の三つが人間にとってこの上もなく貴重な宝であり、それ自身として追求すべき目的であることには、もちろん少しの変りもないのである。今日文化といわれるものの中で、学問が真を、芸術が美を希求し、他方道義が善の実践に外ならぬことを思えば、直ちに納得が行くことである。いやしくも正常に発達した文明国人ならば、自ら意識すると否